

意見交換会

キーワード：福祉住宅、開口部、木製サッシ、ユニバーサルデザイン

浴室の手すり

会場A：浴室に手すりを付ける際に、例えば縦の方が良いのか、あるいは入るときが良いのか、あがる時の方が良いのかなどいろいろ迷います。書籍などを見てもわりとバラバラです。当然、それは人によって違うということは十分認識できますが、こういった仕方がユニバーサルデザインとして適当かを教えてください。

西代：行う動作を順を追っていくことが、一番大事だと思います。まず、浴室に入るときに段差があるお風呂でしたら、段差をなくせばよいですが、なくせない場合もありますし、安易に段差をなくしてしまったために後で困る、ということもあります。

例えば、浴室の中にすのこを敷いて段差をなくす場合、すのこを洗浄したり干したりすることが、重くてできないということがあります。それで、段差をなくさない場合には、例えば入り口の所、戸の付いている所、入る所のすぐ横や縦に手すりを付けると、段差を乗り越えやすくなります。

浴槽をまたぐときや立ったり座ったりする所では、横と縦の両方の手すりがあった方がよいです。浴槽の中に入って、一番居心地の良い所でしゃがむとき、体がぐらついたり落ちないように保持するためには横手すりが良いです。こういうものがあると、もしも介護の人が付いたときでも、手すりにつかまってもらうことによって、介護力の軽減になると思います。

風呂にはタオルかけがありますが、そういうものでも、全体重をかけなければ使うことができます。風呂のふたをとめるストッパーなどにも、つかまることができます。

高齢者と窓

司会：サッシとバリアフリーあるいはユニバーサルデザインとは、どういう関係があるのでしょうか。いろいろな本で、トイレ、風呂、敷居の段差や階段などに

ついては随分言われています。しかし、なぜ窓やドアの話が大きく出てこないのでしょうか。

西代：高齢者と窓ということで、一番気をつけているのは、その窓が家の中で何のために何か所あるのかというようなことです。

一つには避難ということがあります。例えば、地震が起きたときや火事が起きたときに、高齢者だけの世帯や単身者だけの世帯で、自分で逃げやすい窓がドア、玄関以外に1か所以上あるか。もしも近所の人が助けに入るときに、入りやすい入り口が、1か所はあるか。これは防犯面と相反する部分があるので難しいですが、注意事項としてあります。

また、高齢者が長時間部屋にいる場合、例えば、ベッドの上に長くいるような場合には、窓からの眺望というのは、非常に重要な意味があり、窓が社会の接点だったりします。

それと、高齢者には鉢植えを好む人がたくさんいて、そのために出窓を付けてほしいという話が結構あります。確かに出窓は、外から見るとアクセントになって、中からは面積を広げてみせる非常に良い部分ですが、高齢者や体の不自由な人が使う場合は、その形と出窓の奥行きに気をつけなければならないと思います。例えば、床から600mmとか900mm上げた所に450mm出窓を出して、なおかつ外開き窓の場合は、高齢になったら、その窓を開けることはできても閉めることはできなくなります。

出窓を作るときは、いつも誰が開閉するのかをしっかり考えておかないと、作ってしまったけれどもということになりかねない部分だと思います。

外から室内を見る

林：バリアフリーから少し離れますが、窓の機能として、中から外を見えるというのがありますが、一人暮らしで倒れたというような生活の異変が分かるように、外から見られるのも必要だと思います。

どうして、バリアフリーに窓が出てこないのかと考えますと、窓が開けられなくなるくらい生活レベルになると、家にあまりいなくなってしまうのではないのでしょうか。それより、もっと生活に必要なことができなくなってくるというような、体の問題があるのかなと考えています。

窓の開閉力がどのくらいになったら、開閉が不自由になってくるかと考えた場合、そこまで力が落ちたら、例えば冷蔵庫を開ける、などの生活の中での動きができなくなってしまうのではないのでしょうか。家の中で介護を受けることが容易にできるようになれば、もう少し窓の機能もバリアフリーという視点から考える必要が出てくると思います。

窓の開閉方式

会場B：窓の開閉方式ですが、日本の多くの窓は外開きで、北欧ではほとんど内開きですね。最近ではバリアフリーの考え方から、引き違い、引き込みという開閉方式も製品化されていますが、なぜ日本は外開きなのでしょう。それに対して、私は疑問を持っていて、内開きであれば窓の外側を家の中からお年寄りでもふけるのに、外開きだとふくことが不可能なこともあると思います。また、外開きだと落下防止装置を2階や3階に取り付けたいと思っても、外に付けることができません。内開きであれば付けることができるので安全性があると思っているのですが、なぜ日本は外開きなのでしょう。

司会：なぜ日本で外開き、または引き違いなのかという話ですが、異論はあろうかと思いますが、私が理解しているのは、日本の住宅が狭いからではないかと思っています。内開きにすると窓の内側に物が置けません。カーテンが引っかかることがあるし、近くにタンスを置くとぶつかるなどいろんな問題があります。ヨーロッパに行くとき日本より少しはましですね。

それから、今は日本では引き違いが圧倒的に多いです。最近少しずつ外開き窓が増えてきています。それは気密性が高いからです。

北海道の場合は、日本の平均より開き窓が多いです。それは、気密性、水密性が高い、内側に物を置ける空間ができるということがあるからだだと思います。ただ、力がない人がどうする、清掃をどうする、安全性をどうするという話になると、内側に開く窓をそろそろ考えてもよいのかなと思います。

内開き窓にする必要は必ずしもないと思います。換気だけを考えると、北海道の場合は内倒し窓で十分対応できます。それで、林産試験場では内開き・内倒し(ドレーキップ)窓の内倒し機能を有効活用したらいかがでしょうか、という提案を以前からしています。

ドレーキップ窓の良さ

会場C：ドレーキップ窓は換気効果が高く、子供や老人でも開けられます。難しいのはカーテン関係くらいだと思います。雨じまいは全く心配ありません。なぜなら、雨が降っているときには、内倒しでほしい防ぐことができるからです。

私の所では、年間20棟くらい建てているある建築屋さんの15棟くらいに、ドレーキップ窓を入れていますが、お客さんからのトラブルはほとんどありません。もう少し内倒し窓の良さを、皆さんに理解していただければよいと思います。

司会：ドレーキップ窓の水密性の問題はない、という話でしたが、気密材が枠にうまく当たらないような場合には、外開き窓より問題は大きくなります。新しいときは水密性は問題ありません。いかにメンテナンスをするかということだと思います。

西代：窓だけではなくて、吊り戸棚や一般の物入れにもいえるのですが、北海道の人はその扉が折り戸だったり両開きだったりすると、なにか新しい、かっこいいと感じて喜ぶという傾向があります。

物入れの扉を引き違いにすると、昔のもののように感じる。そういうのが、窓が一気に外開きになった理由の一つにあるように思います。だから、これは誰が開閉するかを考えていくと、場所によって良い物を選ぶのではないかと思います。

家具の使い勝手

司会：最近の住宅というのは、箱物家具は少なくなって、備え付けの家具やウォークインクローゼットのようなものが増えていますが、その使い勝手について、どんなことに気を付ける必要があるのでしょうか。

西代：クローゼットも、扉だけや中の棚や引き出しを全部組み合わせた商品は建材メーカーであります。そこに使う扉が片引き戸だったら一番デッドスペースがないわけですが。開き戸だとデッドスペースはできますし、折り戸でも、若干少ないですがデッドスペースはできます。

でも片引き戸だと、なんとなくセンスのある設計だと思われたいということもあり、使い勝手よりセンスを優先させて引き戸が使われていると思います。

置き家具の良さ

会場D: 今、インテリアの勉強をしている30代の女性が多く見られますが、例えばデッドスペースをいかに少なくするかといった空間の有効利用のために、キッチンなどの収納でも、引き違いが非常にはやっています。

最近、作りつけの収納がはやってきたと思いますが、ライフスタイルが変わると、例えば子供ができたり、子供が自立して家から出ていったりすると、旭川の家具のような置き家具の方が融通が利くので、私は推奨したいと思っています。

西代: 「旭川の家具がとても良いものなのは分かっているけど、家を作ったり直したりするだけでお金がめいっぱい買えない。」という声はよく聞きます。

もっと勉強を

司会: 先日新聞に載っていたのですが、理学療法士や作業療法士の方が、例えば病院に入っている方が退院するときいろいろなアドバイスをし、こんなものがあったらよいですよ、と言われた。言われたことを鵜呑みにして、そのまま建築屋さん「リフォームす

るのでこういうのが良いと先生が言っていたから、付けてくれ」と言ったらとんでもないものが付けられた。例えば、L型の取っ手が前後逆に付いていて全然使い物にならない、というようなことが書かれていました。

住宅の設計士には、バリアフリー住宅について全く知らない人がいます。けれど、医療関係の方は、住宅の設計士はプロだから知っていると思い込んでいるところがあると思います。

バリアフリー住宅と銘打った住宅が、建て売りでよく建てられています。先ほどの西代さんの話でも、症状によって障害を克服するやり方は違うということでしたし、使う人の状況を見ないで、最大公約数ですませてよいのかという疑問を、今持っています。それで、住宅を設計される方も材料を供給する方も医療に携わっている方も勉強をしなければいけない時期だと思えます。

それと、窓の話も今までいろいろ出ていましたが、もう少しそういう状況に応じた窓があってもよいのではないかと思います。

司会: 石井 誠 北海道立林産試験場 企画指導部企画課長

(文責: 林産試験場 石井 誠)

コラム

木製サッシフォーラムについて

平成14年2月19日、かでの2・7(札幌市)において「2002木製サッシフォーラム」が開催されました。

このフォーラムは、林産試験場、北海道木製窓協会の主催(後援:(社)北海道林産技術普及協会)で平成7年度から毎年開催されており、今回で7回目を迎えました。行政、木材業界、建築業界、研究機関などの関係者が木製サッシや木造住宅に関する情報や意見を交換し、新たな分野の開拓や、木製サッシの需要拡大を図ることを目的としています。

今回は、本誌でも紹介したとおり「バリアフリー住宅」に関する講演が行われました。ハウスメーカー、設計、建材業界を中心とした154名の参加があり、一部立見となるほどの盛況でした。講演後の意見交換会では、参加者から多くの質問や意見が寄せられ、講師と活発な討論が行われました。

